令和６年度　　大町市立美麻小中学校　　魅力ある学校づくり評価シート　（A：十分である　B：概ね十分である　C：やや不十分である　D：改善を要する）

学校教育目標	教育課題	自己評価・総合評価			学校関係者評価・まとめ
		校長先生が別紙で評価します			学校運営協議会長が別紙でまとめます
		成果・課題	評価	改善策・向上策	学校関係者評価の結果及び意見
心と体をひらいて学ぶ美麻の子	**協働の学びの質を高める**				
	重点1　学びづくり 単元の核心、単元のプロセスを明確にし、質の高い「問い」を意識した授業づくりを目指します。	職員がLCで実践を共有したり、授業を互いに見合ったりすることによって、質の高い「問い」を意識した授業づくりの理解が深まった。また、教師の構えとして、「聴く・つなぐ・もどす」が共通理解として位置づいたことにより、子ども主体の学びが展開できた。児童生徒が自分のわからないことや考えを、友達に自然と伝え合いながら、納得解を見出そうとする気風が育っている。	A	引き続き、教師が単元の核心・プロセスを明確にしたうえで、児童生徒の思考過程を大切にした学習問題や今日のゴールを設定していく。振り返りの場面で、単元を通した学習問題に対する現時点の考えを書くように促すことで自分の学びをメタ認知できるようにしていく。 職員間で子ども観や授業づくりについて気軽に話し合えるような気風を、さらに醸成していく。	・学校運営協議会長が別紙でまとめます
	重点2　体づくり 元気アップ運動を継続し、持続可能な体力向上と健康生活の習慣化を目指します。	職員が元気アップに参加することや９年生が活動づくりに参加することがよい影響となり、見学者が減るなど、運動へのモチベーションが高まっている。さらに、各自の元気アップの個人目標を掲示することで、目標を意識しながら運動に親しむ習慣が身に付いてきた。	A	児童生徒とともに考える元気アップを今後も行う。メニューだけでなく、「目的」や「高めたい体力要素」も共有し継続的に取り入れることで、運動への意欲付けを行う。また、体力テストの結果から、運動の効果を実感できるように振り返る場を設けるとともに、元気アップメニューがどのような体力要素に繋がるかを示す。	・学校運営協議会長が別紙でまとめます
	重点3　集団づくり 自治活動や歌声づくりを基盤として、信頼し合う人間関係と、互いに高め合える集団を目指します。	対話を軸とした歌声づくりが集団づくりの核として位置づいている。歌声づくりの活動が他の活動にも波及し、リーダーの子どもが目的をもって意欲的に活動している。フォロワーもリーダーを支えようとして活動し、フォロワー反省会が定着した。また、活動に参加できる子が増え、見ている子も活動に対して前向きに考えている。職員が、子どもの内面を“聴く”ことが位置づいた。	A	リーダーの活動に対する思いや目的を積極的にフォロワーに伝え、目指すゴールに向かって活動をより充実していくように促す。 リーダー会・フォロワー反省会で、視点をもって話し合いをし、出た意見を次からの活動に反映できるようにする。 職員は、それぞれの思いを聴くとともに、長期的な視野をもって、特性に応じた集団との関わりを模索していく。	・学校運営協議会長が別紙でまとめます

領域	対象	評価項目	評価の観点	一学期の振り返り	評価	改善策・向上策	二学期の振り返り	評価
教育活動	学びづくり	主体的に学ぶ授業	「３つの学び方」が大切にされた主体的に学ぶ授業が行われている。	子どもたちが自分のわからないことを言葉にし、自分の興味や関心を追究する姿勢が見られる。教師がLCを中心に授業改善に取り組んでいることが要因の一つと考えられる。一方で友達の考えを傾聴する姿勢が不十分な面がある。	B	「聞く」ではなく「傾聴する」姿勢を育てるため、具体的な場面やロールプレイなどを通して、その違いを伝えていく。 自分のわからなさを自由に言い合い、友達のわからなさを受けとめられる授業環境を作っていく。	教師のつなぐ支援によって、友達のわからなさに耳を傾けて一緒に考えようとする姿勢が徐々に育ってきた。また、わからないことを素直に口にできる子や、気になることを友達に自然と伝えている子が増えた。	A
			「その子たちにあった学習問題」から生まれた、自分のわからなさ（問い）の解決や願いの実現という目的をもって授業に向かうことができている。	多くの子が自分の「わからなさ」や「願い」を解決または実現しようと目的意識をもって取り組み、学習問題に対しての納得解を創出しようとする姿勢が育ってきている。	A	子どもたちが「自分事」として問題解決、願いの実現に向かえるように、子どもたちの「わからなさ」「願い」を取り入れた学習問題を位置づけていくことを意識していく。	教師がＬＣなどで「その子達に合った学習問題」を考え合い、実践したことで、多くの子ども達が協働の学びを楽しむ授業が増えた。引き続き、その子達に合った学習問題を心がけ、学びを楽しめる環境づくりに努めたい。	A
			「学習問題」「今日のゴール」「単元の核心」等をもとに、１時間や単元の終わりに、学びの自己調整ができている。	OPP を活用して継続的に学びの振り返りを行うことで、学びの自己調整の習慣化が広がりつつある。一方で、学習問題とつなげて考えることが難しい子どもの姿もあった。	B	授業の終末の５分間は振り返りの時間にして、確実に振り返られるようにする。また、自分の見方・考え方をしっかり言語化できている子どもの OPP シートなどにふれる機会をつくっていくことで、自己調整のモデルの共有を図っていきたい。	毎時間、学習問題や今日のゴールに対する自分の考えを記すことを積み重ねていることで、自分の学びの歩みを自覚できている子が増えてきた。また、互いに振り返りを共有することで自己調整に生かしている子もいる。	A
		考える力が高まる授業	個の学びが尊重され、対話を通して新たな見方・考え方に出合う授業が行われている。	個で追究する力がついてきているだけでなく、必要に応じて自分のタイミングで対話をし、見方や考え方を深めていく姿も育ってきている。	B	教師が単元デザイン・授業デザインを明確にして、友達の考えが思わず気になるような学習問題、今日のゴールを設定していく。また、必要に応じて、子どもたちと対話の意義を考えあい、対話の質の向上を図っていく。	友達との対話によって意欲的に学びを深めている子が増えている。そのような協働の学びのよさを感じている子たちは、さらに積極的に友との対話を行い、新たな見方・考え方に触れ、自分の考えが更新することを楽しむ姿も見られる。	A
			学習問題の解決や願いの実現のために ICT 機器や思考ツールなどを有効に使って考えることができている。	ステップ期から徐々に子どもが主体的に ICT を活用して、情報収集を行ったり思考をまとめたりすることができるようになってきている。	B	LCなどで実践を共有し合うことで、教師自身が ICT や思考ツールへの理解を更に深め、授業で使う機会を増やしていく。	日常的な学びの中で必要に応じて ICT を活用することができている。今後は学年に応じて段階的にスキルアップできるようにしていきたい。	B
	体づくり	健康づくりや体力づくりを意識した生活習慣	職員は、児童生徒が健康に気をつけて体力づくりを意識できるように努力している。	職員が一緒に参加することが、子どもに良い影響になっている。今後も全職員で元気アップに取り組む。また、活動をともに行うことが信頼関係に繋がる。 「健やかカード」を学期ごとに１週間記録を取ることで、生活習慣への意識を高めることに繋がっている。	A	継続して職員が活動に参加することで、子どもとともに体力づくりへの意識を高めていく。 ゲームやテレビ、ICT への依存による健康被害について、子どもが自分の実態を捉えて課題や目標を設定する指導の場面を設ける。	体力づくりや健康づくりを意識するようになったかについて、アンケート結果から全体を通して昨年より１０％以上増加し、意識が高まった。また、健康習慣や時間の使い方について、全国と比較したデータを元に、自分の課題を見付ける場を設定し、生活に生かすように声がけできた。	A
		元気アップ運動へ積極的に取り組む子ども	学校の元気アップ運動を通して、体づくりや健康づくりを意識できるように工夫している。	各自の元気アップへの目標を設定し、掲示することで意識を高めることができている。成果を自覚する場がなくても、意欲的に取り組む姿があるので、主体的な活動になっている。 元気アップの内容も多様にあり、飽きさせない工夫がある。 その日の運動種目の目的や効果について話を聞くことができ、運動へのモチベーションが高まっている。	A	「児童生徒が考える元気アップ運動」の内容の充実を図ることで、主体的に運動に取り組むことができる。子どもたちが目的を理解して、主体的に取り組めるように、子どもが主導で進める時間を２学期以降に設けていく。	元気アップの目標を掲示することで、目標に向かって運動に親しむ習慣が身に付いてきた。 ９年生とサーキットメニューを考えたことで、全校がより取り組みやすいメニューをつくる機会となり、下級生にとっては体力づくりへの意欲付けに繋がった。この取り組みによって体力向上を図ることができた。	A
	集団づくり	コミュニケーション力を高め、信頼し合える人間関係づくり	学校教育活動（学級づくりや自治会活動、歌声づくり、行事）を通して信頼し合える人間関係が築かれている。 ①自治会　②歌声づくり　③行事	自分の仕事に対して一生懸命取り組み、時間のない中で実施までよく漕ぎ着けている。役が重なり苦しんでいる生徒もいる。フォロワーがうまく支えられていない面もある。歌声づくりには前向きで、歌声が響いている。 話し合う場面では、話している中身が情報共有や情報伝達になって、対話まで発展しないことがある。	B	時間内でできる適正な目標を設定していく。また行事準備への負担感軽減を図るため、行事の精選・スリム化ができるか検討していく。 連絡・宣伝を充実させ、企画者の思いが伝わるようにする。 今後はリーダーが慣れ、対話のあり方などをより考えていけるだろう。フォロワーも、活動づくりにどう関われたか振り返る機会を設け、友のよい姿をより認め合えるようにする。	予め企画までの期間を伝えることで、準備期間を意識しながら、計画的に準備を進めることができた。そういう姿を伝え、見通しがもちにくい子にも良い姿として広がってほしい。 連絡の内容が充実し、やることだけでなく、目的や思いを伝えるようになってきた。フォロワー反省会を行うことが定着し、活動にどう参加したかを振り返ることができた。これから、「どう活動を主体的につくったのか」など内容を充実したい。	B
		命の重さを知り、権利を守る	学校は一人ひとりを大切にし、いじめが発見されたら対応が早く、差別のない楽しく安心できる場所になっている。	生徒指導係を中心に、職員が今何を指導をするか、気持ちをそろえている。個を大切にし、トラブルの早期発見・解決に努めている。それでも、突発的に起こるトラブルへの対応が難しい。	B	行事が終わった時に、時間にゆとりをもってお互いの努力や良い姿を認め合えるような価値づけの時間を設ける。それぞれの活動で、子どもが自分の状況を客観視できるようにしたり、本音で話したりできるように、時間と場を設ける。	互いのよさを感じ合える時間を設けたこともあり、ほとんどの児童生徒にとって、学校に大きな不安がなく過ごしていることがアンケートからわかる。集団や対話が苦手な子も中に入れるように、一人ひとりに寄り添いながら、さらに考えていきたい。	A